

名産品ブランド化 課題は？

弘大生が収穫、意見交換

大 間

弘前大学の学生2人が24、25日、大間町奥戸地区などを訪れた。オコッペいもとして栽培されているじゃがいも「三円薯」の収穫体験や地元住民との議論を通じ、名産品のブランド化、生産者・生産量拡大などに向けた課題や対策を検討した。町は昨年から関係人口事業を開始し、同大の学生が参加している。町は来年以降も学生に参加してもらい、若手人材の視点を取り入れながら課題克服につなげたい考えだ。



授(農業経済学)ゼミ4年の立石公利さん(23)と、愛知県岡崎市出身の同大大学院地域共創科学

研究科1年の小原桃々さん(23)札幌市出身。同日午後2時から約1時間、2人は町野菜部会のスタッフと共に三円薯の収穫を行った。強い日差しが照りつけ土煙が立ち

25日は町役場で、地元住民と意見交換を行った。町のPR動画を見ながら、大間不動産の小浜年高さんが町の文化や食などを説明。2人は、産

込める中、農機で掘り起こしたイモを一つずつ丁寧に拾い集め、コンテナに入れていった。

品の希少価値を高めつつ、町と継続的に関わる「関係人口」を増やすための方策を練った。約2時間の議論で、希望者が会費を払って農作業に参加し返礼品を受け取るオーナー制度を導入することで「関係人口を維持しながらブランド化につなげられるのでは」などと意見を集約した。

立石さんは「希少価値を高めながら生産者や関係人口を増やすサイクルの確立について考えた」、小原さんは「大間には住民が地域の食などに触れる文化がある。学生の視点でもっと発信していきたい」と話した。

(川越真也)

【写真上】三円薯の収穫を体験する小原さん(左)と立石さん(右)【同下】名産品のブランド化などについて地元住民と意見交換を行った弘大生(奥の2人)

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。無断転載はできません。